

[研究ノート]

プラハ・カドリエンナーレ 2019 —国際舞台美術展参加報告—

Prague Quadrennial 2019 —An International Scenography Exhibition Participation Report—

二村周作

FUTAMURA Shusaku

〈抄 録〉

舞台美術の世界最大規模の展覧会が4年に一度チェコ共和国・プラハ市で行われている。この展覧会は「プラハ・カドリエンナーレ」と称され、本年は2019年6月に開催され多くの国や地域から舞台芸術家たちが参加した。本稿は、舞台芸術の祭典「プラハ・カドリエンナーレ2019」(以下「PQ19」)における、国際展示の状況と日本学生部門の取り組みについて報告するものである。

キーワード：舞台美術、セノグラフィー、サイトスペシフィック・パフォーマンス、インスタレーション、パフォーマンス・アーツ

Abstract

The world's largest exhibition of performing arts is held every four years in Prague, Czech Republic. The exhibition is called the "Prague Quadrennial" and opened in June 2019, with performing artists from many countries and regions. This article reports on the state of international exhibitions and activities of the Japanese Student Exhibitions at the festival of performing arts, Prague Quadrennial 2019 (herein after referred to as "PQ19").

Keywords: Theatre Design, Scenography, Site-Specific Performance, Installation, Performing Arts

1. はじめに

PQとは世界中の国や地域からの出展と独自の企画展示で構成されており、舞台美術に特化した大規模で国際的な展覧会である。舞台美術デザイン、衣裳デザインから、照明デザイン、音響デザイン、インスタレーション、サイトスペシフィック・パフォーマンス¹⁾や舞台美術の応用など、様々な舞台美術に関わる分野の実践について幅広い研究・発表を行っている。PQ公式ホームページによれば79の国や地域から800名を超えるアーティストが参加し、総来場者数は延べ7万人を超えた²⁾。開催日



図1 PQの会場Industrial Palace（プラハ産業宮殿）

は2019年6月6日から16日まで前述のチェコ共和国プラハ産業宮殿において行われた（図1）。

世界各国で様々な舞台芸術が日々生まれており、4年に一度のこの展覧会はそれらを完全に網羅するものではないが、新たな舞台美術の可能性を肌で感じることは大変意義深いことである。

2. 展示の状況

2.1 全体状況について

展示カテゴリーは主には以下の3つに分かれている。

1. 国と地域の展示（Exhibition of Countries & Regions）
2. 学生展示（Student Exhibition）
3. 空間とパフォーマンスデザインの展示

今回2019年の全体のアーティスティック・コンセプトは「イマジネーション／変容／記憶」（Imagination/ Transformation/ Memory）と設定された。このテーマに沿ってPQに参加する国や地域の参加者は展示又は上演作品を選定、制作する。

会場は全体平面図を見ると主に10箇所の展示および上演エリアから構成されていることがわかる（図2）。ゲートをくぐるとまず目の前には象徴的なセントラル・ホールの建築物が見え、その両翼にメイン展示となる各国のプロフェッショナルが展示する国・地域別展示と、学生展示がある。会場はそのほかにも歴代の著名な舞台美術家達の作品群をアカデミックな視点で展示する「フラグメンツ（Fragments）」、会場前の広場をサイトスペシフィック・パフォーマンスエリアとして開放する「フォーメーションズ（Formations）」、レクチャーや討論会などを行う「PQトークス（PQ Talks）」、映像と照明と音響によるショー「36Q」、子供のための展示「子供達のためのPQ（PQ for Children）」などのエリアがある。



図2 会場の全体平面図（番号は筆者付記）

2.2 国・地域別展域別展示 (Exhibition of Country and Region)

メインホールの右翼には各国からのプロフェッショナルたちの参加により構成されている展示空間がある(図3)。その国や地域の独自性を前面に表現している展示や、国際環境における普遍的なテーマに言及している展示も多く見受けられる。展示作品は実際の上演に用いられたデザインの展示だけではなく、この展覧会のために制作された独立したアート作品も多く含まれる。またオーストリアなど展示空間の中でパフォーマンスを行う団体や、鑑賞者自体を作品の一部として取り込むコンセプトの作品が多く存在した。



図3 国・地域別部門の全景

PQ公式のプログラムの一つとして、展示作品に対してPQ本部が任命した複数の審査員による審査が行われ、優れた内容のものには賞が贈られた。以下に受賞作品を含めた作品を報告する。

作品名：『Infinite Dune』／ハンガリー

この空間は観客自身を「観られる対象」として取り込んでしまう。鑑賞者たちは地面から1m20cmほど浮いた大箱の底に空いた穴に立ったまま頭を入れる。するとこの装置の中では、その頭が無限に広がる不思議な砂漠惑星に生息する小動物のように見えてしまうのである(図4)。この作品は国・地域別展示の最優秀展示賞3点のうちの一つに輝いた。



図4 『Infinite Dune』

作品名：『Staging Placing Studio』／イギリス

作品の展示は模型展示、衣裳実物展示、そして映像による上演中の映像を表示するといったオーソドックスなものだが、中央に円卓を配しここに訪れる人と対話するという空間コンセプトである(図5)。全体の雰囲気は舞台美術作家のスタジオ風に設えられている。



図5 『Staging Placing Studio』

1日に3回の対話の時間とそれぞれにテーマを設定し、プロフェッショナルとして抱える各国のパフォーミング・アートシーンの問題を共有し、論じ合うというものであった。実際に筆者が訪れた時には、パフォーミング・アーツに対する公的助成をテーマにした議論が他国からのゲストを交えて熱く交わされていた。

作品名：『1600 Feet Under』／イスラエル

イスラエルの作品は、舞台模型達を空間にたくさん並べられた棺桶の中に隠して展示するというものであった（図6）。演劇はその上演期間が過ぎ去ると人々の心の中に眠る記憶になる。鑑賞者は、作品名の書いてある棺桶の蓋を一つ一つ開けるという行為を通して、他人の記憶を掘り起こしているような感覚を覚えるのである。



図6 『1600 Feet Under』

その他の国や地域の作品

ベルギーなどいくつかの国々は環境問題に非常に鋭敏な姿勢を見せた（図7）。ネイティブの文化に対する敬意と海洋のイメージを融合させたのはニュージーランドである（図8）。中国ブースの大型展示は文化面においても存在感を示そうという熱意が感じられ、来場者に照明器具をかたどった手の込んだUSBメモリチップを配るなど他の国々には見られない独自のアピールも見受けられた。バルト三国ラトビア、エストニア、リトアニアの展示はシンプルでいながら確たる表現力に基づいた力強さを感じさせるものであった。



図7 ベルギーの展示の様子



図8 ニュージーランドの展示の様子

2.3 学生展示 (Student Exhibition)

学生部門の展示内容も多岐に亘っており、インスタレーション展示、パフォーマンスを行う展示、観客が積極的に参加することによって成立するインタラクティブ（双方向）な作品が多く展示されていた。以下にPQ19の公式審査会において学生部門における最優秀展示作品、イマジネーション賞などを受賞した作品を中心に、各国の展示の主だったものを紹介する。

作品名：『The Prague Experiment』／イタリア

実験室を模した空間で行われる観客参加型のパフォーマンスである（図9）。観客はまずスタッフに扮したパフォーマー達の診察を受け、指にパルスを測る小さな器具をはめ、いくつか簡単な質問をされて中に入る。観客の鼓動が電気信号に変換され、無菌室に音響となって響き渡る。そこで促され

るままにダンスを踊ったり体を動かしたりしながら1～2分ほどの時間を過ごす。動きと音響効果と、ビジュアルが相まった大胆で想像力を活性化させせるユニークな試みだ。PQ学生部門においてイマジネーション賞を受賞した3作品のうちの一つである。

作品名：『Kolo』／フィンランド

突然現れた巨大な土塊のような、不思議な生き物のような形状の作品（図10）。思わず側によってそのざらついた表面を触ろうとすると、中から響く鼓動もしくは耳鳴りのような音が聞こえる。「小動物が自分たちを守ろうと見つけた穴から触発された」³⁾ この奇妙な巣のような隠れ家が、見るものにミステリアスで得体の知れぬ官能的な感覚で観察するものを包み込む。

視覚的要素のみならず、聴覚的な要素を巧みに取り入れ、観察者の五感に揺さぶりをかけるこの作品は、PQ学生部門全体において、最優秀展示賞の3つの作品の一つに選ばれた。

作品名：『The Changing Room』／台湾

台湾のチームは、一見すると台北にある下町の居酒屋のような参加型インスタレーション空間を制作した（図11）。試着室のような狭い個室に通され、そこで壁に書いてある指示書きを読み役割が与えられ、備え付けのヘッドセットを装着する。そして彼らは作品の一部となって観る者でもあり観られる存在ともなる。PQ公式ホームページでは、「新しい環境のための革新と挑発の粋とも言えるべき作品。最先端のテクノロジーと、伝統的なキャラクターの物語、そして深い遊びの感覚を用いて観客と演じる者の関係を再考する。」⁴⁾ と評されている。この作品はジョージア、フィンランドと共に学生部門の最優秀作品3本の中の一つとなった。

その他国や地域の学生の作品

そのほか、「第9の学校」と銘打ちトレーラーを持ち込んだフランス（図12）、高いフレームの上にオブジェを配したスペイン（図13）、黒いコンテナの中にワーグナーをテーマとした展示を展開したラトビア（図14）、違う舞台美術の模型を複数組み合わせ全体としては一つの大きな彫刻作品のようなものを作ったイスラエル（図15）など各国の展示方法はバラエティーに富んでいた。



図9 『The Prague Experiment』



図10 『Kolo』 全景



図11 『The Changing Room』 全景



図12 フランスの展示



図13 スペインの展示



図14 ラトビアの展示

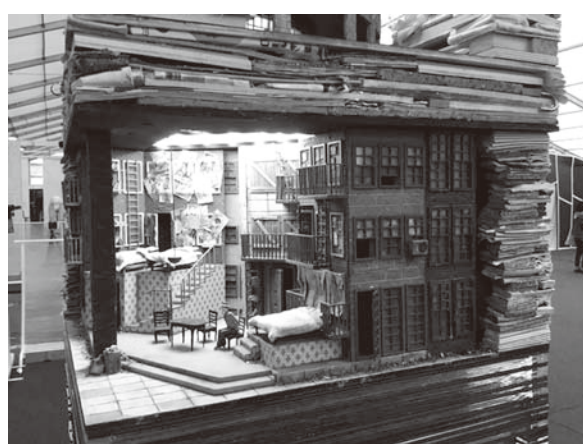


図15 イスラエルの展示

3. 日本学生展示の取り組み

3.1 展示の概要について

次に日本の学生展示について少し触れたい。日本の展示は、国・地域別展示も学生部門も共に主催団体は日本舞台美術家協会⁵⁾であり、筆者は日本学生展示部門のキュレーターを務めた。2018年12月にコンセプトは両展示とも『SASAGERU』（ささげる）、学生展示の展示テーマは「日本の舞台美術教育の断面」と決まった。

日本の舞台美術教育はその学校や担当者によって指導方針が大きく異なるが、それらの教育機関で勉強する者の作品をあえて一堂に展示し、現在の日本の舞台芸術教育を少しでも俯瞰できないか。この展示はこうした問いからスタートした。

従って、例年は学校単位で作品を取りまとめ選出してもらおうという方法をとっていたが、今回は一般公募を行い、11名の作品展示者を選出するに至った。作品を提出した学生や、仕込みに参加した学生らは小池れい氏はじめ日本舞台美術家協会会員、本学の菊地芳子教授、山田洸士技術指導員らの尽力のもと現地業者と協力し合い、自分たちの手でブースを組み上げ、国際交流という面でも有意義な成果を残した（図16）。

3.2 ブースのデザインについて

2018年5月、各国の展示場所が発表され、日本ブースはクロアチア、フィリピン、オランダなどが占める一角に場所が決まった。ブースのデザインは、展示者の作品の特質を最大限わかりやすく展示できるように自然の木の色と白を基調色に可能な限りシンプルなものとした(図17)。各国とも割り当てられた平面サイズは5メートル×5メートルであり、このスペースの中にかくにテーマに沿った、しかも来場者に観やすい展示用ブースを設営するかが日本ブースの課題であった。しかも予算は非常に限られており、また日本からヨーロッパは地理的条件も厳しい。

従って日本で制作して現地に輸送をする方法を採用するのは現実的でなかったため、日本でデザイン⁶⁾を行い、プラハの制作業者に大道具製作を依頼するという手法を取った。

さらに協力者を介し、テアトル・アルファ⁷⁾の劇場支配人やコブ・ホラとコンタクトを取ることができた。彼は自分の劇場のみならず、チェコの他の劇場ともネットワークを持っている演劇人で、彼の仲介で、大道具製作者によって我々の描いたデザイン画の具現化が叶った。



図16 日本ブースの全景

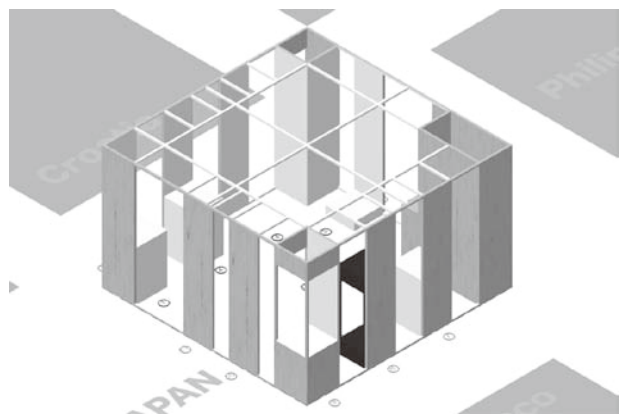


図17 日本の学生展示ブースデザイン画

4. まとめ

1999年からほぼ毎回、筆者はPQ展の現地視察を行う中で舞台美術の発表展示の方法における変化を感じている。

元来、舞台美術というものは、それ自身が鑑賞されるものではなく、演劇やオペラの作品を成り立たせる一部として存在する。戯曲が声に出されて読まれることで初めてその真価が味わえるように、舞台美術は俳優やダンサーがその空間で演技をすることで、初めて「作品」として成立するものである。舞台美術家達は常にその点に留意し、過去のPQ展においても、この既存の舞台美術の概念を逸脱しないような作品展示が多かった。

具体的には舞台装置デザインについては模型、デザイン画、実際に上演された舞台写真のパネル展示という方法が主流であったし、衣裳デザイナーの多くは、デザイン画、トルソなどに着せた衣裳の実物展示、そして演者が衣裳を身に纏って上演を行う写真を展示した。

PQ07(2007年)の頃を境に徐々にこの伝統的展示方法に変化が見え始めた。例えばインスタレーション展示、パフォーマンスを含む展示、観客が参加することによって成立するインタラクティブ(双方向)型の作品数の増加がそれである。一方で舞台画、衣裳展示または模型のみを展示するといういわゆる「伝統的展示方法」を選択した国々はあまり多いとは言えない状況になりつつある。この傾向は

近年ほぼ継続的に見ることができ、今回のPQ19においても主流であり、現代の舞台美術の発表展示における一つの重要な傾向と考える。

最後に今後の教育活動への展開について、芸術というものは額縁に納められて鑑賞するだけのものではなく、我々の社会を映し出す鏡であり、自分たちの暮らしにも密接に関わるものであるということを学生たちが理解をすることは大切なことである。自ら足を運んで現地で感じ、経験する実地型の教育方法は、今後の舞台芸術教育において非常に効果的な手法である。

今後も次回のPQ23はじめWSD21（ワールド・ステージ・デザイン展、2021年8月カナダ・カルガリーにて開催予定）など注目すべき国際芸術展が続いている。海外の学生が質が高く最新の芸術文化に触れることのできるよう、このような機会をより効果的に教育的資源として活用できるように研究を深めたい。

謝辞

PQ19において、本学の学生を安全第一に引率し、仕込みや劇場見学を含め貴重な機会を与えて下さった菊地芳子教授と山田洸士技術指導員、そしてお力添えを賜った先生方に多大なる感謝を捧げます。

注

- 1) 街中の一角や、カフェの中など上演される場所の特性を生かした上演形態。
- 2) PQ公式ホームページ <https://www.pq.cz>、最終閲覧日2019年10月30日
- 3) PQ公式ホームページ フィンランドページ <http://www.pq.cz/projects/event-detail-en/?exhibition=80>、最終閲覧日2019年10月30日
- 4) PQ公式ホームページ “Award’s winners” <http://www.pq.cz/awards-winners/>、最終閲覧日2019年10月30日
- 5) 舞台美術の視覚的・美術的要素を担う日本全国の舞台美術デザイナー、舞台美術関連の技術者、舞台美術教育・研究者が所属する職能団体。1958年発足。
- 6) デザイン制作：株式会社二村周作アトリエ。
- 7) ALHA THEATRE, なお、彼はチェコ共和国のオフィシャルブログに紹介されている。
<https://czechrepublic.jp/czech-culturehistory/> チェコ人形劇のいま -czech-puppetry-now/ 最終閲覧日2019年10月30日

参考文献

- Burian, Jarka. *The Scenography of Josef Svoboda*, Wesleyan University Press, 1971.
Howard, Pamela. *What is Scenography?*, Routledge, 2001.
Program 2019. *Prague Quadrennial of Performance Design and Space*, Art and Theatre Institute, 2019.